

森林空間総合整備事業にともなう
洗馬城跡発掘調査・復旧事業報告書

2005. 3

真田町教育委員会
真田町農林課

例　　言

1. 本書は、真田町森林空間総合整備事業にともなう洗馬城跡の遊歩道設置に際し、本郭の一部に損壊があったため、該当部分を発掘調査し、元況に復す復旧作業を行なった報告書である。
2. 本調査は、長野県教育委員会文化財生涯学習課總田弘実氏の保護措置指導により、信州大学人文学部教授笠本正治氏の現地での教示を得て、真田町教育委員会の委託により、洗馬城調査復旧作業団が行なった。調査及び復旧作業日は平成16年5月17日・22日・24日である。
3. 発掘調査は元況に復する資料を得るために、損壊部の本郭虎口と推定される部分約5mに限定し、併せて本郭周辺の測量を実施した。
4. 本郭周辺の測量は、笛長野県林業コンサルタント協会が行ない、発掘調査に伴う実測は、調査復旧作業団が行なった。
5. 発掘調査の撮影は、児玉卓文が行なった。
6. 発掘調査実測図のトレース、及び本郭周辺の実測図を元に作成した縄張図の作成とトレースは、児玉卓文が行なった。
7. 本書の編集は、真田町教育委員会と協議しながら児玉卓文が行なった。

目　　次

例　　言

I	洗馬城跡の概要	1
II	調査の概要	1
III	調査の所見	4
IV	復旧措置	6
V	総括と課題	7
VI	写真図版	8
報告書抄録		

I 洗馬城跡の概要

『真田町誌』歴史編上によれば、以下のとおりである。

通称城の山・八幡さまの裏の城、『長野県町村誌』では古城といわれている。傍陽小学校の裏山にあたり、字表と字宮ノ前の境にある。

なお、「源氏御符札之古書」(『信濃史料』第九卷 三貢)のうち応仁二年(1468)四月の条に記されている「千葉城」はこの洗馬城であろうと考えられる。

登り口は三通りある。一つは長野真田線沿いの、菅田足玉神社(八幡社)の横を尾根に登る道である。もう一つは傍陽小学校のグランドから、城山の南のふもとを登る道である。これは「堀の内」からの登城口で、標高800mの城郭中枢部へたどりつく城道である。そしてもう一筋は、実相院の観音堂から、水の手を登り、本郭背後の大堀切にたどり着く道であるが、この道は現在分からぬ箇所が多くある。

本郭からの展望は人軽井沢から地蔵峠への道と、大倉方面がよく望める。本郭とふもとの八幡社との北高はおよそ125m、本郭は東西9m、南北39m、西縁と北縁に土塁が設けられたと思われる土居跡(高さ0.5~1m)が認められる。本郭の腰部に設けられている段郭は、南側の部分に四段数えられる。本郭背後の掘切は深さ13m幅30mある。

城のふもとは松代道と洗馬道が交わる場所で、戦国期には根小屋城とともに、地蔵峠を押さえる重要な城であったと考えられる。

片城者については、中世においてこのあたりを領有したとされる、曲尾氏あるいは村上氏の草下などが推定されるが、後証を待ちたい(第1図)。

平成10・11年度に行なった町内山城砦張図作成調査では、本郭の土塁の反対側中央付近に、幅約2.4m、長さ約6mに渡って一段落した部分が注意された。その東縁は1段乃至2段の石積でラインが構築され、本郭南尾根に構築された段郭の内、上から2段目の曲輪から南斜面に犬走りが巻き、一段落した部分に対応する箇所には石積構築物の破壊と思われる石の集積が見られたため、本郭の一段落された部分が本郭の虎口ではないかと推定された(『真田町の遺跡—遺跡詳細分布調査報告書』)。

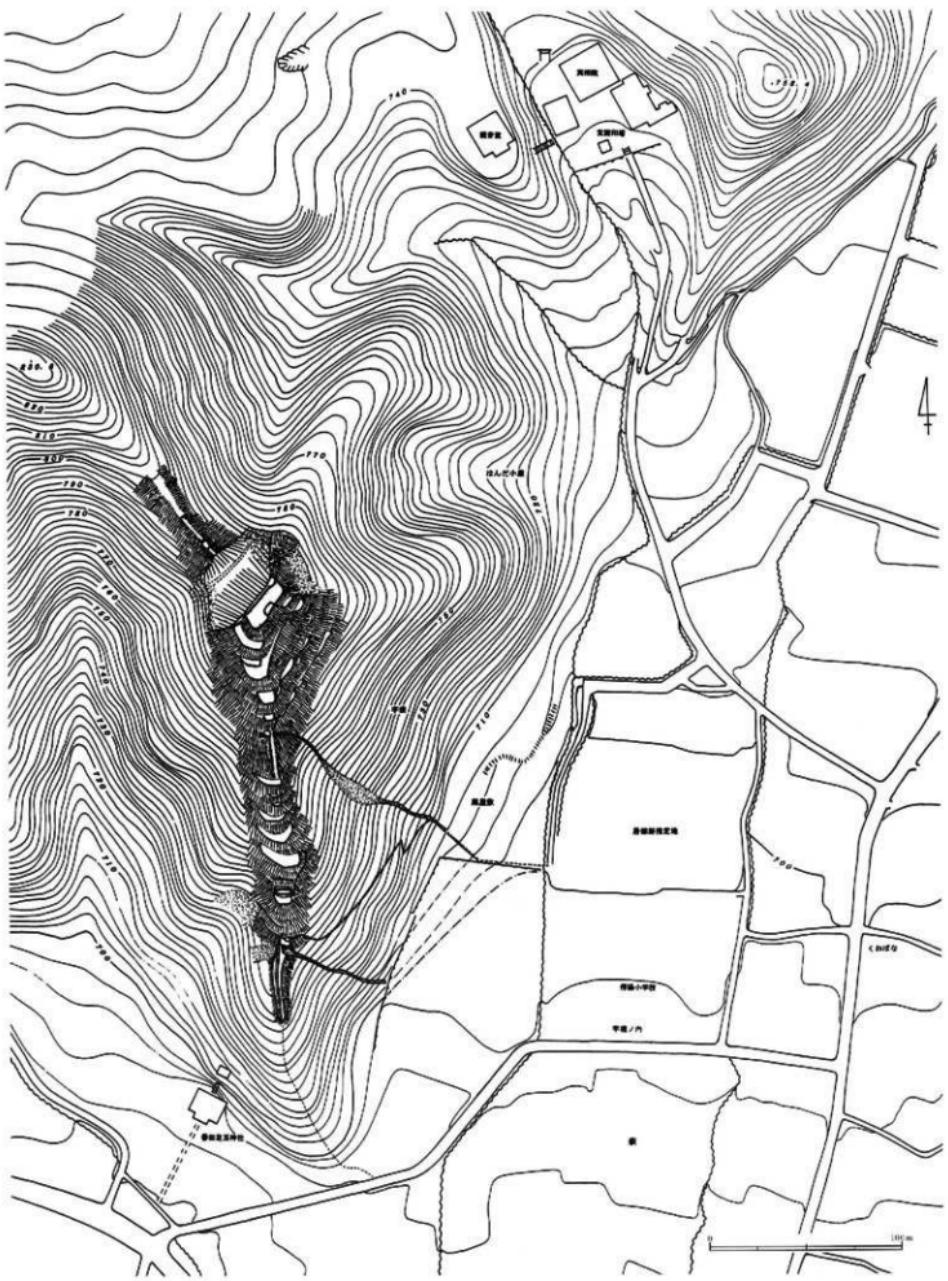
II 調査の概要

洗馬城跡は、以前に地元住民により柏道を利用して丸太階段による遊歩道が設置され、各曲輪の一部が変形されていた。今回の整備事業ではそのルートを生かしながら遊歩道を再構築し、新たに上から2段目の曲輪から南斜面を走る犬走りを経て、本郭の虎口と推定される部分に梯子状階段のルートを設けることとした。

工事は、この梯子状階段のルート上端の損壊と虎口の変形、及び以前の遊歩道が本郭東南へ取り付く部分の損壊を招いたため、虎口の発掘調査の資料をもとに復旧することとした(第2図)。

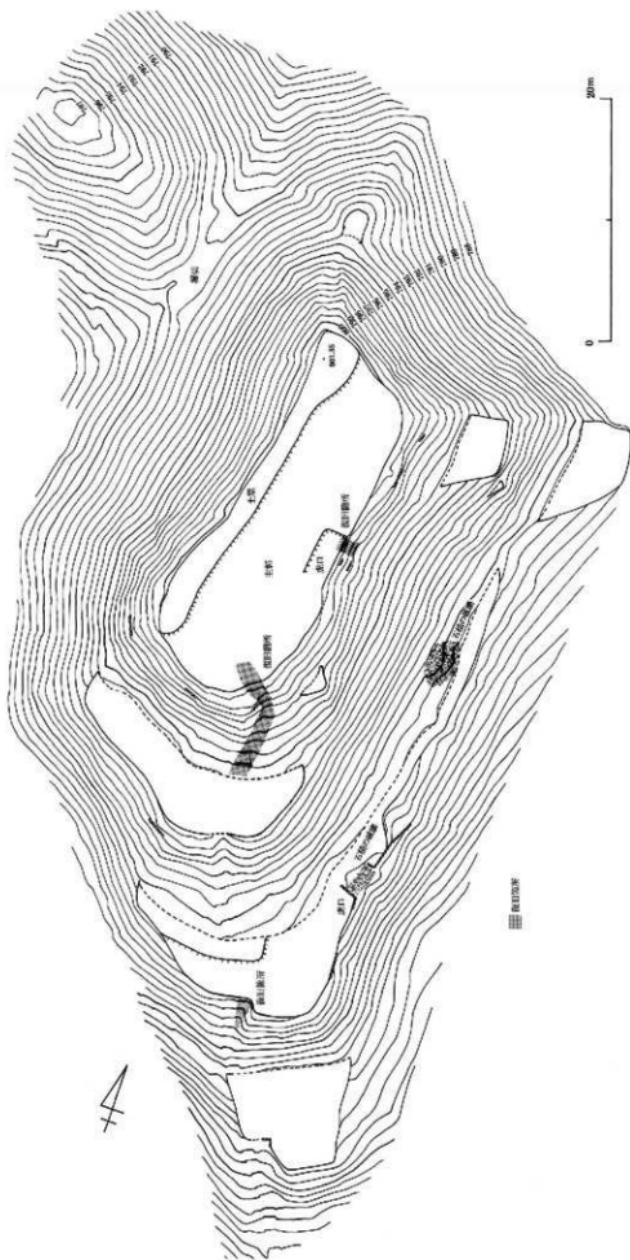
広面積の発掘調査は異なる損壊に繋がりかねないので、発掘面積は虎口の損壊部を掘り下げ本郭成形の手法を探り、虎口の変形については遊歩道の盛り土・丸太など構造物を排除して原地表面の探し出しをすることとした(国版1・2)。したがって掘り下げた面積は $1.8 \times 2.6\text{m}^2$ 程度であり、原地表面探索の調査は虎口の周辺部である(第3図)。

本郭の虎口への遊歩道設置、及び東南部の既存のルートを利した遊歩道の再設置工事の部分損壊により掘り出された石は60個余りあったが、山石と河原石の割合はほぼ1対6で、河原から運び上げられた石がやや凌駕する。



第1図 洗馬城跡拡張図

第2図 洗馬頭路本部周辺断続図



遊歩道整備に先立って行われた開伐により、2段目曲輪の東縁から本郭の南斜面に廻る犬走りに連なる部分に本城中最大の石による構造物があることが判明した。それは、曲輪東縁の石積みの延長が角をとって内側に屈折し、3mの空隙を置いてほぼ直角に屈曲する石積が対応しており、その高さは斜面側で1m以上を数え、虎口と推定される（第2図）。使用された石は主に河原石で、双方の石積の間に奥部の石積を破壊したと思われる河原石が詰まっている。

先述した犬走りの先に石による相当規模の構造物を破壊したと思われる石の集積があるが、これも川原石が多い。これらの外には部分的に小規模な石積が斜面途中に見られるのみであり、上工による地中から掘り出された川原石の多さは意外であった。

したがって、これらの石が各曲輪成形に際しどのように使用されたかを把握することは復旧作業の鍵となるため、発掘調査の主眼の一つに据えることとした。

〈洗馬城発掘調査及び復旧に係る体制〉

発掘調査及び復旧作業

（事務局）真田町教育委員会生涯学習係

教育長 大塚貢

教育次長 大塚久文

生涯学習係長 井沢洋

生涯学習係主任 武拾義夫

（調査及び復旧作業）洗馬城調査復旧作業団

調査主任 児玉卓文（長野県立歴史館専門主事兼学芸員・日本考古学协会会员）

調査員 和根崎剛（真田町役場観光商工課（H15）／

和田村役場住民課（H16広域連合派遣交流職員）・日本考古学协会会员）

作業員派遣 朝上田地域シルバー人材センター

復旧作業参加者 朝長野県林業コンサルタント協会・聯三井建設・真田町農林課・真田町教育委員会

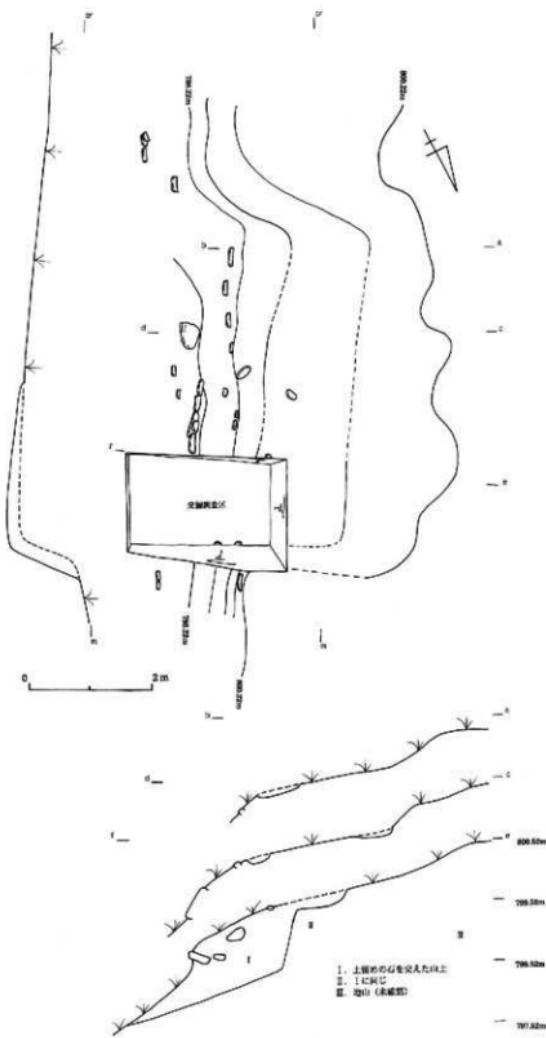
III 調査の所見

本郭の虎口周辺の原地表面は、落ち込み部の下辺と東縁の天端が削平を受けている以外は残存しており、その全体形態を把握することが可能であった。町内山城柵張岡作成調査では、本郭の虎口を矩型に全体が落ち込む形状として図化したが、幅2~2.5mで南から北に6mほどに渡って緩やかな坂をなしている（第3図）。

損壊した虎口東縁は、地山を求めて上部で約1m掘り下げたが地山には到達しなかった。それ以上の掘り下げと、斜面下方への発掘面積の拡大は、埋め戻し後の崩壊を招く可能性があると判断し、掘り下げを中止した。

山の形状から考えると、この部分に限らず本郭の東は、削り出しではなく盛り土による切岸成形と判断される。盛り土は、石を非連続的に平置きにしつつ、細かい砂混じりの山土で被ったものと観察されたが、特に突き固めた様子は見られない（第3図断面図、及び図版9）。これは残存する本郭の土壁にも共通する。

切岸表面は段状に、1段あるいは2・3段に石積みをして干で被う部分もあるが、石積みの段は不連続である（第3図）。虎口の損壊部天端には町内山城柵張岡作成調査時に1段の石列があったが、北方にも南方にも残存は見られず土坡による成形である。



第3図 本郷虎口の実測図

また、石積は河原石あるいは山石を平積みしたもので、第3図断面図に見られるように裏込めは無く特に突き固めた様子も観察されない（図版4・5）。

したがって本郭東側切岸における石積みは、北東に高さ1mほどで残存する石積み（図版6）以外は、垂直の防備面を作り出すために積まれたものというより、切岸成形の土留めとして部分的に積まれたものと判断される。

IV 復旧措置

1) 本郭虎口と東側切岸

損壊部分は、石を平置きにしつつ土を被せて突き固めながら充填し、損壊部両側の切岸面に石積みがある部分は、切岸東北部の残存石積（図版6）を参考に、両側の形状に合せて石を平積みした（図版7・10）。

土留めを兼ねて遊歩道のステップを作り出すため、2段の石積みをし土で被った部分一個所と、丸太を横置きして土で被った部分を一個所設けた（第4図、図版7）。したがってステップの踏高には差異が出来た。

2) 本郭虎口上面

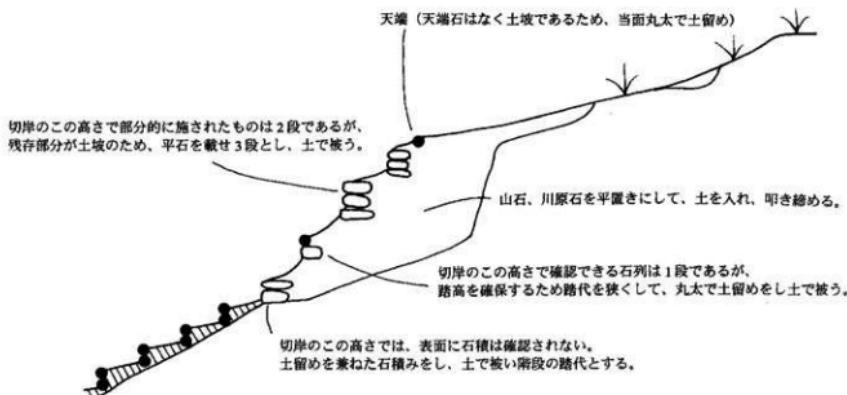
削平された部分に現地表面に合せて土を入れ、切岸にかかる縁は土留めのため丸太を横置きし、鉄杭で固定して土で被った（図版11・12）。

3) 本郭南東部と切岸（Ⅲ遊歩道部）

損壊した南東縁と切岸は、本郭虎口及び東側切岸同様に石を平置きにしつつ土を被せて叩き締め、要所に木杭と丸太による上留めを設けて土で被い成形した（図版13・14）。

4) 第二曲輪の南縁部

本郭南東部と切岸同様、石を平置きにしつつ土を被せて突き固めた。



第4図 本郭東側切岸復旧模式図

V 総括と課題

真田町では、山城跡や居館跡が里山的身近さにあるため、山の産業が衰微した今日でも周辺住民により親しく利用されてきたものが多い。

町の森林空間総合整備事業はそうした歴史を踏まえつつ、「森と縁 やすらぎ空間構想」のもと里山を保全しつつ積極的な活用を図り、貴重な史跡を後世に伝えようと実施された事業であるが、岡らずも遺構の一部損壊を招き、遺跡の保存と活用の難しさを改めて痛感することとなった。

計画立案に当たっては、関係当局と地元区代表を交えた会議や現地踏査を何回も行なったが、施工業者との打合せ及び施行時の現場立ち会いが不十分であったことが、今回の遺構損壊の主要な原因となった。しかし発掘調査及び測量により資料を得て復旧が可能となったことは、関係当局や施工業者の協力の結果と感謝申し上げる。

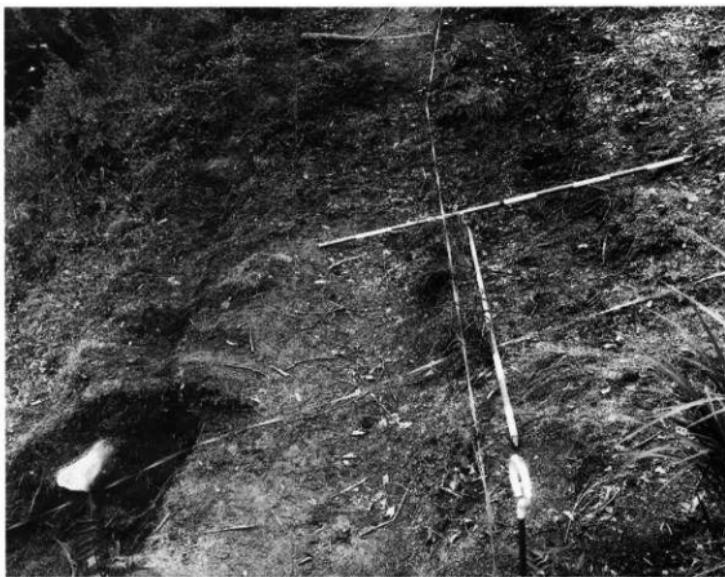
今後とも城跡の里山を、共同体の生きた証として保存し、そして共同体の絆形成の一つの資として親しんでいただけすることを願っている。

(児玉平文)

VII 写真図版



図版1 本郭虎口の遊歩道の丸太などを撤去した状態（南から）



図版2 本郭虎口の発掘調査前の状態（北から）



図版3 本郭東側斜面と発掘調査区(北から)



図版4 発掘調査区の南側土層断面



図版5 発掘調査区の西側土層断面



図版 6 復旧作業で参考にした本郭東側斜面に残る石積



図版 7 復旧作業完了の本郭東側斜面（下から）



図版 8 復旧作業完了の本郭虎口と東側斜面（南から）



図版9 虎口東側斜面の復旧前



図版10 虎口東側斜面の復旧後



図版11 本郭虎口の復旧後（北から）



図版12 本郭虎口の復旧後（南から）



図版13 本郭南東斜面の復旧前



図版14 本郭南東斜面の復旧後

報 告 書 抄 錄

ふりがな	しんかんくかんそうごうせいびじぎょうにともなうせばじょうせきはつくつちょうさ・ふつきゅうじぎょうほうこくしょ						
書名	森林空間総合整備事業にともなう洗馬城跡発掘調査・復旧事業報告書						
副書名							
巻次							
シリーズ名	真田町埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ番号	第13集						
著者名	児玉 卓文						
編集機関	真田町教育委員会 TEL0268 (72) 2655 http://www.town.sanada.nagano.jp/						
所在地	〒386-2201 長野県小県郡真田町大字長7199-1						
発行年月日	平成17(2005)年3月30日 印刷 はおずき書籍株式会社 長野市柳原2133-5						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積	調査原因
洗馬城跡	長野県 小県郡真田町 大字傍陽字林	20345	146		平成16年 5月17日 5月24日		史跡整備に 伴う調査
主な所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
洗馬城跡	城館跡	中世	主郭・虎口・段郭等		かわらけ小片		

**森林空間総合整備事業にともなう
洗馬城跡発掘調査・復旧事業報告書**

平成17年3月20日 印刷

平成17年3月30日 発行

編集 真田町教育委員会
〒386-2201
長野県小県郡真田町大字長7199-1
TEL 0268(72)2655

発行 真田町教育委員会
印刷 ほおづき書籍株式会社
